

哲学対話のうまくいかなさを考える

—こんなとき、どうする？—

永井玲衣

(上智大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程、Core Talk Cafe 運営)

学校で、まちで、家で、哲学対話をしていると、あれ？と思うことがある。もっといい対話のあり方があったんじゃないか、とむずむずする。そもそもわたしってなんで哲学対話やってたんだっけ、どうしてわざわざこんなことしてるんだっけ。つまらなそうにしている参加者を見て、どうにかしなきゃと咄嗟に思うけど、なんでつまらなそうだとどうにかしなきゃいけないって思うんだっけ、とぐるぐるする。本当に哲学対話っていいものなんだっけ。

第3回哲学プラクティス連絡会では、「あれ？うまくいってないな」とか「こんなとき、どうしよう」と、実際にわたしが日々の

実践で感じた状況や、他の実践者から聞いた話を、参加者のみなさんに体験して貰うためにロールプレイング型のゲームを発表した。

【ゲームのルール】

(1)3人グループを作り、2名が哲学対話の実践者、残りの1名が哲学対話をしていて居心地の悪さを感じたり問題を抱いたりしている参加者の役割を演じてもらう。(2)サイコロをふり、その対話がどの現場(小学校、中学校、高校、企業、哲学カフェなど)で行われているのかを決める。(3)「こんなとき、どうしよう」と思えるような、参加者の発言や困難な状況が書かれたカードを一枚ひく。

苦悩の扉

(4)数分間、実践者二人はどのような対応をしようかを話し合う。(5)実践者はどうすれば状況が変わるか参加者役に提案をし、参加者役はカードの内容に沿って役割を演じる。(6)しばらく対話をつづけたら、全体でどのような意見が出たか共有する。終わったら役割を変えて何度か繰り返す。

予め用意したカードは20枚ほどで、全部を紹介することはできないが、例えば以下のようなものがある。

(カード例①) 話していると泣き出した

対話をしていたら、自分の意見を言っていた人の声がだんだん細くなり、ついには泣き出してしまいました。あなたには、なぜその人が泣いているのかはわかりません。(大学)

(カード例②) 下ネタや下品な発言が多い

問い出しの段階から、下ネタや下品な発言をして生徒がふざけています。なんとか対話をはじめた

ら、まだ生徒たちは真面目にやろうとはせず、ふざけつづけています。(高校)

(カード例③) 「自分には向いていない」

哲学に関心がある生徒です。「哲学は好きだけど」と言って「自分には向いていないと気づいた」と言われました。(中学)

ゲームは、以上のカード群から一枚をひき、実際に自分がその現場にいたらどのような提案をするか、もしくはそう感じている参加者の身になり、どのような部分にその戸惑いの端緒があるのかを探究することになる。

だが当日、会場からどのような提案や新たな戸惑いが出たかについても、詳述することはできない。なので、今回は参加者の方々のアンケートや反応を基に、日頃わたしたちはどんなことに「どうしよう」と感じているのか、苦悩しているのかについて考えてみることにしたい。

ワークショップ終了後、参加者

苦悩の扉

の方々にアンケートの協力をお願いした。メインの質問は「(1)哲学対話のファシリテーターをしたときのこんなときどうしよう」と「(2)哲学対話に参加したときのこんなときどうしよう」の2点である。以下は集計結果をわたしが雑駁に分類したものである。おそらく適切な分類が為されていないと感じる方もたくさんおられると思うが、説明のためとご容赦頂ければと思う。当然、分類した項目同士が重なることも多いだろう。また、ファシリテーターと参加者を分ける必要があるのか、すなわちファシリテーターも参加者の一部なのではないか、といったご意見もいただいたが、こちらも両者の役割に違いが見られることが多いため、便宜上分けることにした。そして、それぞれのケースに対して、わたしの個人的な見地から、どのようなことが考えられるかについて、簡単にコメントすることにした。

【哲学対話のファシリテーターをしたとき、「こんなときどうしよう」と思ったり、ヒヤッとしたり、困ったり、嫌だなど思ったり、悩んだり、落ち込んだりした状況、発言、反応などを教えてください】

Case1：誰か喋ってくれ、みんな考えてくれ

みんなシーンとする。互いに様子見してヒソヒソ話す。原因はクラスが安心安全の場になっていないから。／哲学対話そのものをやった事がない児童生徒に哲学対話のイメージをつかんでもらうのが難しく、対話そのものが進まない。／対話そのものに興味がなくどうでも良いと感じている雰囲気は漂っている時。／発言がなく、沈黙が続くままに時間が過ぎ、ゆっくり考えているから発言がないというよりも本当に何も考えていないだけの時間になっている時。／話が出ない。話が尽きる。対話が途絶える。

今回のアンケートでは、最も

苦悩の扉

case1 の事例が多かったように感じられた。沈黙には様々な意味があるが、回答にもあるように「どうでも良い」雰囲気が漂っているため、もしくは「様子見してヒソヒソ」、「何も考えていないだけ」などの理由で生じている場合にはたしかに「どうしよう」案件となるかもしれない。そんな沈黙には様々な原因が考えられそうだ。第一には「話す」「考える」ことが恥ずかしい、イタいと思われている場合。一生懸命考える、話すということがカッコ悪いという雰囲気が漂うと、その状況を打破するにはなかなか困難だ。一人の生徒が気を遣って喋ってくれるが、今度はその子が冷ややかな目で見られたりしてしまう。正直言うと、わたしはこの状況が一番「どうしよう」と思ってしまう。第二には、単純に何の時間かわかっていない場合である。哲学対話について十分解説もできないままにスタートしてしまうとありがちである。第三には、問い

に関心がない、面白いと参加者が感じていない場合である。哲学カフェのような自主的な集まりではなく、授業などで「強制的に」哲学対話をする際に見られる傾向性があるだろう。自主性の伴わない哲学対話はするべきでないのではないかという議論もよく聞くが、また別の問題になるためここでは一度措きたい。

Case2：一部だけが盛り上がっている

最後に他の人が長く話しすぎて十分に話せなかったと言われた時（まあ、それもありがた、と思いましたが）／少数の人以外黙ってしまっている時。

一部の盛り上がり。あそこらへん喋ってないぞ、と気を遣いながら一部の人の語りに耳を傾けるのは確かに神経をすり減らす。わたしが哲学カフェをするときは、「人の話をよく聞く」ルール説明のときに「自分が話しすぎてないかな、あの人話せてないんじゃないかな、なんて周りに配慮もぜひ

苦悩の扉

してみてください」などと言うこともあるが、全員で一丸となって同じ理解度と同じ情熱量で探究を進めていることが可能な場合は、特に大人数だと起こりづらいのは事実だろう。対話を手助けするツールとなる「コミュニティボール」が有効という話はよく聞く。

Case3：これって哲学？

単なる自分語りになっている時。／自分の悩み事を相談しようとして哲学対話に参加してきた人がいること。

「哲学対話」の「哲学性」問題である。わたしは哲学研究をしているのでやはり気になるところだ。「対話」と言わず「探究」と表現する場合もあるが、人それぞれだったり、自分の思いを吐露するような場では無く、ここは哲学「探究」をする場であることのあるわれでもあると思われる。だが同時にその「探究」する対象としての「真理」とはいかなるものなのか、という問題についても考えてみたい。

Case4:突っ走り

話がカタい方向に行き過ぎて、一部の参加者が置いてけぼりになったと薄々気づきつつ、自分の興味で突っ走ってしまったとき／（特に教室で哲学対話をする場合に多いように思うが）ファシリテーターである自分だけが楽しそうにしている（現に楽しく考えていて）、参加者のほとんどがつまらなさそうに、表面的な意見を述べ続けているとき。

昔、ファシリテーターが突っ走っている哲学対話を体験したことがあるが、その人が本当に知を愛し、哲学できることが心底嬉しそうだったので、内容について行けなくともなんだかじんとして、この人と自分はいつかちゃんと哲学したいと思うことがあった。そうした探究の「モデル」として働くことがあるということも一言付け加えておきたいが、参加者が現に「不満」だと、やはり見直さなければならぬだろう。

苦悩の扉

Case5: ファシリ難しい

哲学対話初心者なので、最初のテーマ選び、対話の出発地点をどうするか悩む／話がそれてしまっている時／どこまで自分が発言して良いのかがわからない。つまり、参加者の発言頻度のバランスは参加者が取るものなのか、ファシリテーターが取るものなのかが未だによくわからない。／小さい子が苦手な仕方ない。／初めて来た人に十分なフォローができてなくて不満そうだったとき

ある男子校で、何について考えたい？と聞いたら「排便」と言われて、これをどう哲学的にしようかと悩んだ。共にその場にいた友だちが「どうしてこういう場でふざけたくなっちゃうか、不思議じゃない？それについて考えたい」と返していてなるほどと思った。でも友だちが出したテーマでも、排便でも、問い方は何でもスタートできそうな気がする。「排便はなぜタブーとされるのか？」など面白そうではある。

Case6: ファシリを評価される

ファシリテーターを所謂「教師」的な立ち位置のものだと見なし、積極的に発言・権威的な知識の披露を求められる。／なんだか空回りした回で、終わった時に一言もらったら、「期待したけどこんなもんか、と思った」みたいな反応だったとき「もっと違うんだよ～」と言いたくなった／「話がまとまらない」と言ってファシリテーターにまとめを要求された。／誰も話さなかったり、沈黙が続いている時に、私は全然平気だし、むしろ「よい！」と思うわけなんだけれど、哲学対話の理念とか考えを共有していない・反対している人がその状況を見ている場合（あまり遭遇したことないが）を想定。そのとき、そういう人たちが、「ほら！哲学対話なんて無理じゃん！意味ないじゃん！ファシリなんにもしてないじゃん！へたくそ！」と思ってそうだなって思うのが嫌だ。被害妄想ではある。

苦悩の扉

最後の回答は込み入って笑ったが、ファシリテーターを評価されることにまつわる「セーフティ」の脅かされ、である。「へたくそって思われてるんだろうなあ」と思いながら探究するのも嫌だし、そんなことを気にする自分も嫌だし、そのせいで探究がおろそかになっているかもしれない状況も嫌である。逆に先日ある人がはじめてファシリテーターをする際に「永井さんに見られるの嫌だ」と言われ、ショックを受けたことを思い出して辛くなった。

Case7:参加者の反応にびびる

ある参加者の発言（問い）によって、（問いを向けられた）別の参加者が傷つき、その場で泣き始めてしまったとき。／哲学対話が終わった後に「何の意味があったんですか？この時間」と言われたとき。／哲学対話が終わった後に「もうこういうこと（深く考えること）はやりたくない」と言われたとき。／ずっと黙っていた人が2つも3つも話題を出して語り

出した。

全てに言えることだが、これ自体はいわゆる「問題」ではない。つまり、参加者が「やりたくない」と言うこと「話題を語り出す」ことそれ自体は一切「まずいこと」ではないのである。だが同時に、自身がそこにファシリテーターとして身をおいていた場合、どのような態度をとり得るか「悩む」ことは許されるだろう。

【参加した時の「こんなときどうしよう」を教えてください】

Case1：しゃべりすぎた！

自分が話し過ぎたと思った時に落ち込む。／自分が喋りすぎたとき後悔する。

ファシリテーターをしているときの「こんなときどうしよう」に「一部だけの盛り上がり」が挙げられていたが、参加者の側でも「話しすぎた」と落ち込んでいる人もいると知ると、少しまた視点が変わって面白い。

Case2：うまく話せなかった・・・

話す内容が完全にまとまってな

苦悩の扉

い状態でも、それ以上まとめるのが面倒になって話して、結果後悔する。話せばそれなりの後悔が必ずあるけども、それでも話す。話すことが目的になってるときもあるからかも。／自分の頭の中には主張があるのに、それをうまく言葉にすることができず十分に意図が伝えられなかった。誤解され、その誤解を解けなかった。／見ず知らずの人に本音を話さなくてはならないこと。／話しすぎるとよくないため、あまり話せない時。／どこまで自分が発言して良いのかわからない。つまり、参加者の発言頻度のバランスは参加者が取る物なのか、ファシリテーターが取る物なのか未だにわからない。

これはわたしは哲学対話の良い点でもあるなと思っている。自分がうまく話せないということが分かること。自分の中の他者に気がつくこと。うまく話せない哲学対話のあとこそ、じっくり、しつこくそのテーマについて考

えることがわたしは多い。うまく伝わって話せた哲学対話、哲学カフェは、意外と記憶に残らなくないだろうか。また「見ず知らずの人に本音を話さなくてはならないこと」。これは個人的には気づきだった。というのも、哲学カフェは、「見ず知らずだからこそ、身分や利害に関係なく本音を話せる」と語られることが多いからだ。でもたしかに、見知らぬ他者に自己開示するってかなりハードル高いかもしれない。知り合いも難しいし、他者にも困難。どういう関係性のバランスを取れば、本音を話し合えるのだろうか。

Case3：わからん

議論している事が分からなくなった時に分かりませんとは言えない。／ファシリテーターの方が整理をして下さっているのにその整理が理解できない時。

ファシリテーターが整理してくれて、みんながうんうんとうなずいているとき、手をあげて「私は分かりません」とは言えない。

苦悩の扉

ファシリ役割は整理してくれるだけでなく、率先して「わかりません」と言ってくれることかもしれない。

Case4：そのふるまいやだなあ

ずっと話を続ける人がいる時。／「自分が知っている哲学用語」は他人も知っているという前提で、得々と「素晴らしい自分」をひけらかすためだけに参加してくる人が話すのをやめない時。意見を否定すると、自分が否定されたかのように反応する。他者に対して「マナー違反」と責め、「あなたの発言にはニヒリズムを感じる」「社会の問題が多々ある中で、（哲学カフェのように社会的な役に立たない）こんなことをして皆さんはどう思いますか」などなどの香ばしい発言をする参加者がいる時にファシリテーターを含めて誰も止めない状態。／話がわき道にそれてしまう発言者がいる。全く別の話ではないので止めにくい。／私的な会話をしているのと同じく緊張感なく対

話しようと参加者のほぼ全てが思っていること。／あの哲学者は～とか有名な哲学者や思想家を持ち出されると対話という場では萎縮してしまう。／発言の後は「あなた何様のつもり？」と言われ、とても嫌な思いで凍りついた。／発言している人の中に、怒りや恨みなどの、こじらせた感情が盛り上がってきてるのを感じとった時、会場も敵味方のようになりそうな雰囲気になってヒヤヒヤする。その時はファシリテーターのひとが、面白がるという態度で接していったら、うまいこと転がって行って、感心した。／「あなたがいま発言したいようだったから」という理由で、ある参加者が別の参加者にコミュニティーボールを渡していたとき。

Case5：そのファシリやだなあ

ファシリが抑圧的であったり、導きたいであろう方向を示したりするのがすごく嫌だ。／「俺ら哲学やってるからよ。この先の展開

苦悩の扉

はこうなって、ああなって、こう
いう議論につながるぜ。いや、け
ど、こういう分かれ道もあるよな
～、ふむふむ」みたいなのもびっ
くりする。

哲学研究科在籍としては耳が痛
い話があった。哲学風を吹かせて
イキってるパターンだろうか。
2017年度の日本哲学会でも「哲学
研究と哲学対話」シンポジウムで、
哲学者の知はどのように扱われ
るべきかという課題が多く話さ
れていた。哲学の知は役に立つが、
それをドヤ顔でご披露するとい
うのは確かに問題である。

Case6: その流れやだなあ

病気になった後に参加した哲学
カフェで死について思考実験的
に軽く扱われたとき／大きな病
気をしたあとに参加した時、思考
実験で不治の病になったらどう
する、みたいな話をされたとき、
意外と気にしちゃう自分がある
ことに気づいた。

勇気を出して「その話はあまり
したくありません」と発言するこ

とはあまりに難しい。自分の事情
や感情で探究を阻害してしまう
かも、と優しい人は気を遣ってし
まうかも知れない。ファシリテ
ーターはこの点においては常にア
ンテナを張っておかなければな
らないだろう。

こうしてみると、皆が様々な
「どうしよう」を抱えていること
が分かる。それが問題とは感じな
いと考えた人もいたかもしれな
いが、現に問題と感じている人が
いる以上、どのような提案ができ
るかは考える余地がある。

最後に断っておきたいのが、こ
の原稿が「正解」や「こうすべき」
という規範性をもったものでは
なく、さらなる探究や対話をひら
くための素材となることを目的
として、書かれているという点で
ある。この文章が、『みんなで考
える』というタイトルの通り、
様々な他者の視点を取り入れな
がら、考えを前進させ、自身の哲
学プラクティスのあり方を深め
ていく一助となれば幸いである。